

要求分析技法の社内適用手順の開発

株式会社富士通研究所

栗原英俊

kurihara.hide@jp.fujitsu.com

自社業務における問題点

トップエスイーで学んだ、要求分析に関する様々な技法をどのような手順で社内に導入・活用していけば良いのかわからない。
特にシステムエンジニアがお客様の要求分析を支援(準委任契約)する際、エンドユーザ間の調整がうまくいかないという問題点を解決したい。

手法・ツールの適用による解決

左記の問題点を解決するため、以下を開発した。
・社内の既存技法と比較して、どの技法を導入すべきかをガイドする要求獲得技法マップ
・社内の既存技法と情報連携した、ステークホルダー依存分析手法*i**[アイスター]の適用手順

要求獲得技法マップによる技法の選択

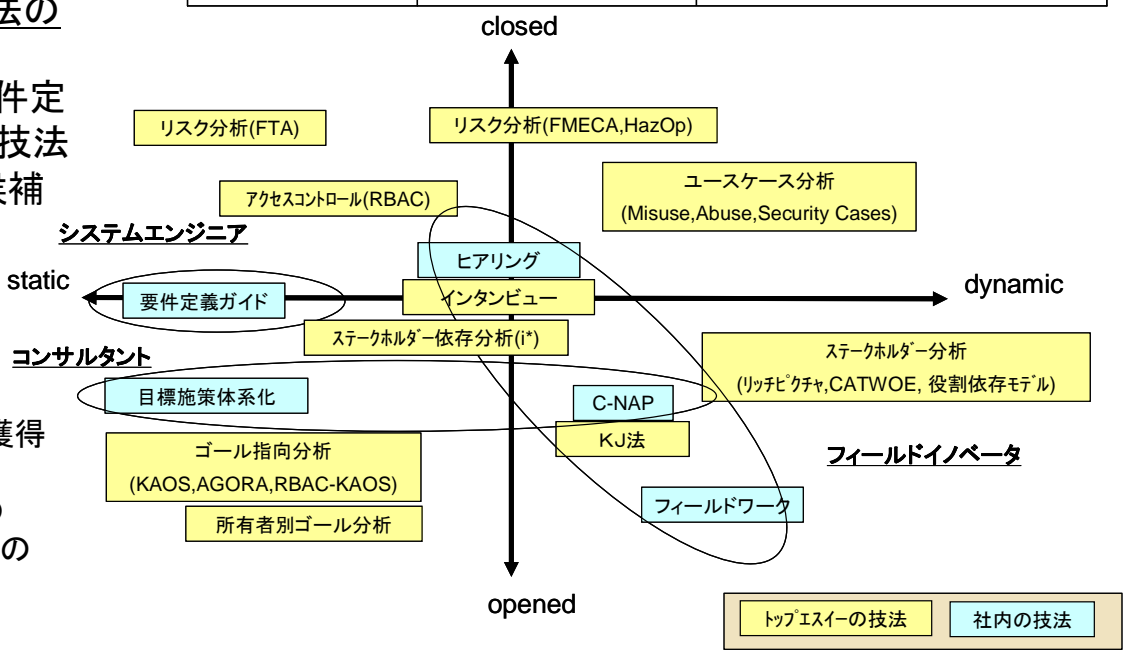
■要求獲得技法マップ

社内で要求分析を担う職種、役割、既存技法は右表の通り。

職種	役割	主な既存技法
コンサルタント	経営/業務の改革	目標施策体系化、C-NAP
フィールドインベータ	現場の改善	フィールドワーク、C-NAP、ヒアリング
システムエンジニア	システムの構築/運用	要件定義ガイドライン

トップエスイーの技法と社内の既存技法を右図のようにマッピングすることで、職種に応じて技法の過不足を容易に把握できる。

例)システムエンジニアは、staticな技法(要件定義ガイド)に頼るだけでなく、よりdynamicな技法であるステークホルダー依存分析が有力な候補(要求獲得を複数の観点で補完)となる。



【要求獲得技法マップ(右図)の軸について】

- ・横軸(技法の分類)
static: 静的構造を用いて要求を分類、獲得
dynamic: ステークホルダーの振舞いや気づきなどから獲得
- ・縦軸(対象の分類)
closed: 要求分析対象がある程度決まっているもの
opened: 要求分析対象が不確定で変動しやすいもの

ステークホルダー依存分析手法の適用手順

■ステークホルダー依存分析(i*)の社内適用手順

システムエンジニアが*i**(アイスター)を適用した場合、社内の既存技法で定義する情報との関連性を右図のように整理した社内適用手順を開発した。

本手順により、*i**の社内導入が容易となるだけでなく、要求分析技法の実効性が高まる。また*i**の”ゴール選択基準がない”という課題解決に繋がる。

■今後の課題

- ・ケーススタディによる評価
- ・*i**技法の用語やモデルを社内用にカスタマイズ

